

米軍占領と安保体制による歪み

木村 英亮

戦後ジャーナリズムは生まれ変わったと考えられている。しかし、1949年から50年にかけて、GHQの「民主化」政策は完全に息の根をとめられた。松本清張は、1948年の帝銀事件から49年の下山事件、三鷹事件、松川事件について『日本の黒い霧』を書いた。それは最初から反米的な意識、「占領軍の謀略」というコンパスで書いたのではなく、「それぞれの事件を追及してみても、帰納的にそういう結果になったにすぎない」（文春文庫、1974、336ページ）と断っている。1950年からのレッドパージでは新聞社、放送局などで被解雇者は700名に上った。NHKは司令部の直接管理下にあり被解雇者に直接GHQ命令の通告がおこなわれた。

年表によれば、1950年6月25日朝鮮戦争勃発、その翌日26日最高検、ロレンス『チャタレー夫人の恋人』押収(9-13 訳者伊藤整ら起訴)となっている。伊藤によれば、「『チャタレー夫人の恋人』を阻止して、とめどない言論出版の自由の拡大にとどめを刺そう、という気配がたしかに官憲の側にあったのだ。・・・広津和郎はこの(松川)事件にその全生活と著作力の総てを注入して戦った」（伊藤「戦後の二十年」『日本の歴史』第13巻、読売新聞社、1966、306、307ページ）。松川事件は第一審では死刑5名の判決を下されたが、63年には最高裁で無罪が確定した。広津は被告の無罪を主張し続け『松川裁判』（1958）を出版した。当時大学の講演で、作家として負担になったのではないかという質問に対する、この仕事が面白くてたまらなかったとの広津の答えが印象に残っている。

占領軍の支配下に健全なジャーナリズムなどありえないかもしれない。「アメリカのスパイ機関は、完全に全日本の機関を支配したうえ、日本の財界、政界、官界、言論界、宗教界、旧軍人、旧特高警察官、旧右翼、暴力団などのなかに、いろいろな方法を駆使して協力者を組織していった」（大野達三『アメリカから来たスパイたち』、祥伝社、2008、114ページ）。1951年の独立後も、安保体制の下で米軍基地は残り、CIAの活動は続いている。

米軍基地があるから安心という考えはおかしい。それは日本の平和、安全、自由に対する最大の脅威であるという感覚こそノーマルなのではなからうか。（2009.6.17）